大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正十四年六月三十日印刷納本　大正十四年七月一日發行

婦人と勞働

七月號

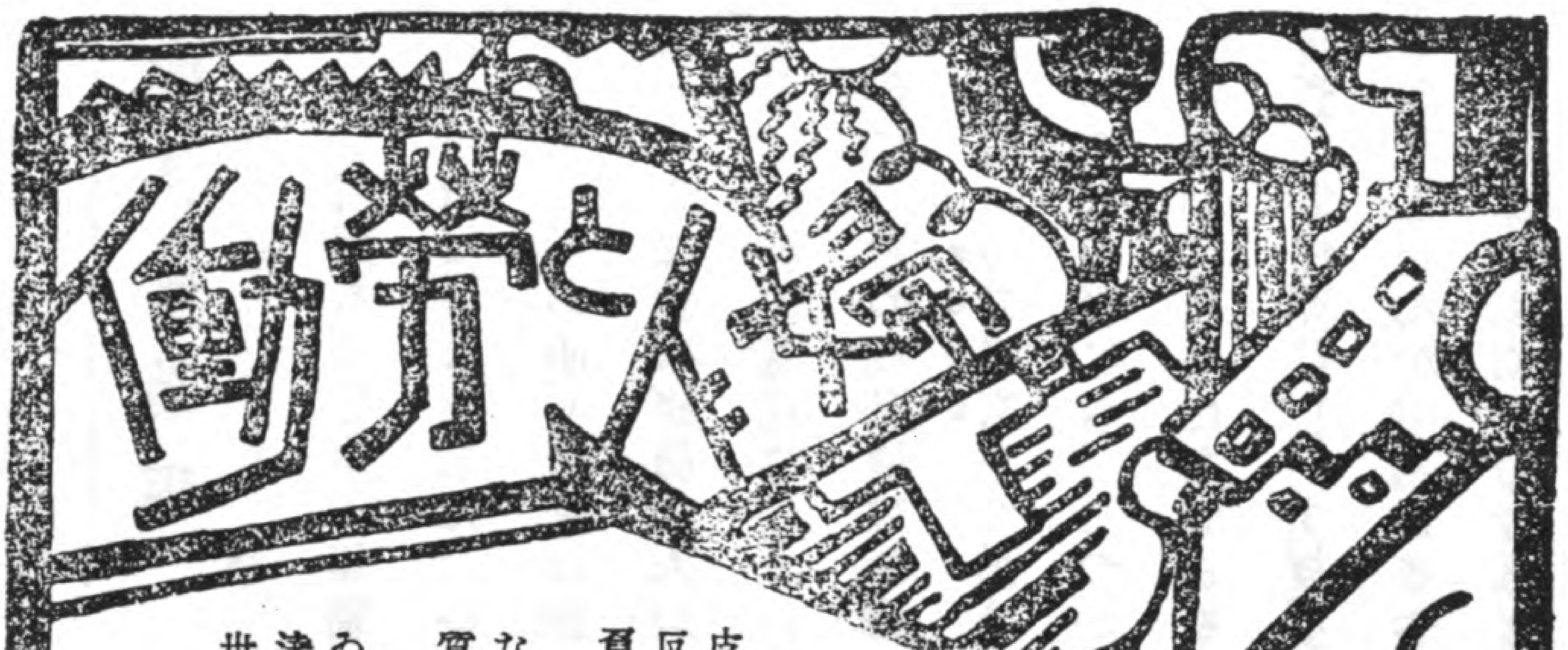


職業婦人社發行

第三卷 第六號

婦人と勞働

十四年 七月號



努力のやり場

ある新聞紙上に於いて某評論子曰く

近頃巷間を彷徨する女性のある一部は、男性化といふ言葉が、一部の女子に棒あげられたと正反對に、極端なる女性化に陷ち込みつゝあると皮肉はのが私達の世の中である。殊に現今の如き過渡期が生む婦人に、斯ういつた反動的分子の色づけられることは、止むを得ぬことながら、全婦人達の心して責を負ふべき問題ではなからうか。

眞實な婦人解放とは、男性化でないと同樣女性化ではない。殊に極端なそれではない。私達はもと〳〵女性以外の何物でもない。私達は何々化さなくともいゝ。本質的の持前を發揮することである。

然し、現代は甚だ私達女性に取つて、不都合な世の中である。餘りに慘酷すぎてゐる。私達の努力は、私達の住む世を創り出すことに注がれねばならない。全婦人達がそれこそ、手を取り合つて進むとき、始めて眞の女性として、價値づけられる世に到達出來やう。

婦人と時事

この不景氣

所用あつて××印刷所にゆきました。いつもの通り倚麗に粧ふた女事務員二人がいかにも紅二点といつた工合に、その殺風景な事務室を彩り顔にあちこちしてゐました。いつもの私なら、しつかりしなさいよ、あなた方はまるで、重寶な彩色劑にしかすぎないぢやありませんか、と、たとへ口に出しては云はないとしてもさう胸の中で呟いて慨嘆するのですが、今日は非常に羨ましくて、思はず二度三度と振返り見ながら出て來ました。

×××保險會社の婦人外交員が見えた時だつてさうです。いつもなら、會社側のその虫のいゝ奸策、露骨な資本家振りに、聞いたゞけでも憤慨に堪へず、何故あなた方は、そんな時默つてへこたれて來てしまふのですそんな事だから職業婦人の地位は、いつになつても見縊られてしまつてゐるのです、と云つた風に思切つてつけ〱云つて口惜しがるのですが、近頃は、そんな會社にこびりついてゐる人さへ、いかにも落付拂つて、自分の職業(?)に精出してゐる姿が羨しい樣な氣になるのです。

今、私のまはりに十何人の婦人失業者が、毎日求むれど、求むれどなほ與へられない求職哀話のその女主人(ヒロイン)となつて、不安な暗い生活をしてゐます。私の家にだつて、一椀の飯をわけ合つて一緒に不自由をしのぎ合つてゐる人が三人もゐるのです。私は始終この人たちの涯しのない不安、捨て場のない不快を見、感じ、訴へられ乍ら、身につまされて自分の氣持も一杯になつてゐるからです。通りすがりの

小娘でも、いかにも行先を急ぐやうにして小刻みに歩いてゐるのをみると、つい、呼びとめて『職をもつてゐる人はいゝねえ』と愚痴つぽい言葉をかけたいやうです。

………… …………

こんなにして、苦しまぎれに二十圓でも、十八圓でもいゝといふ工合にとん／＼柏子にわが婦人職業界は、われさわが相場を瓦落しつゝあるのでありますあゝ。（むめお）

政治研究會婦人部

さき頃開かれた政治研究會の總會で、同會婦人部はいよ／＼正式に誕生してその實際運動の第一歩を踏出しました。

元來、婦人の政治運動は、どこの國でも閑暇あり、財産のある婦人のすることだとされてゐるやうですが、我國はどうかと考へてみるのに、今日まで七八年間の消長を振返つて考へてみても、わが國の政治運動――いはゆる參政權運動もまた、比較的餘裕ある婦人先覺者たちの活動として今日までは行はれて來てゐるやうであります。

いつも云つてゐることを繰返すわけですが、とにかく大多數の婦人、即ち金子の上にも、時間の上にも餘裕のない暮しにおはれてゐる所謂無產婦人の存在を無視して、直接その運動に携つてゐる當事者本位の政治的要求は、どうしても、大多數の婦人の實際生活とは遊離した、獨善的の偏つたものになり勝ちであることは避けられないでせう先達て大坂で、實業同志會の別働隊婦人同志倶樂部の發會式のとき、裾模樣、丸帶、チリメン金紗といふ風な衣裳の婦人が美々しく集つたといふことですがわれ／＼の仲間が寄つたときの世帶じみた話題さ、それらの裾

模樣、丸帶黨の集りに取交(とりかは)されたであらう話題とは、おのづから月とすつぽんほどの違ひがあつたにちがいないことは云ふまでもありません。

で、政治研究會の婦人部は在來の婦人の政治運動からとかく忘れられがちであつた、而も社會的に最も重要な位置をしめてゐる無産婦人によつて、あくまで全無産婦人の生活をよりよくするために、あくまで私たち無産婦人の必要に終始する運動をしやうとしてゐるのでありますですから唯、單に、いはゆる政治的權力――即ち參政權を追ふて汲々とするのでは全然ない。一つの方便として、政治といふ大道を踏んで、われ／＼無産婦人――否々、この社會の大多數を含めて、事實上この社會の存續を双肩に擔つて働いてゐる全無産階級の福祉のために、婦人側も力を一つにして働いてゆかうといふのであります。(むめお)

學生とカフエー

一女學生

近來學生とカフエーとの問題が、ちよい／＼新聞をにぎはす樣になりましたね。これは一すじに學生ばかりを責める事の出來ないのも勿論ですが、といつて學生を治外法權的に、看過してばかりおく譯にも行かぬ問題かと思ひます。現在學生の中に只一方はそこに陷ちるチャンスに逢着したに反し、一方はそれに逢着しなかつたといふ丈の差で、不良少年と偶然にも呼ばれずにゐる人達の、如何に多くが私共の眼につく事でせう。人間としての自尊心を、若き者としての熱情を最も多分に保持して居るべき位置におかれ乍ら、彼等はどこにそれを忘れ去つたのでせう。それを見出し度いと希ふ私達の眼に、如何に多くの、

或は世才にたけた、或は蕩兒的な若者が映る事でせう。露西亞の學生達は、過去に於て、現在に於て如何に多くの仕事をしてるか、近くは支那に於て、多くの學生が、其の働き方の當否に議論ありや否は別として、如何に生き生きとした力を私共に見せてくれたか、思ひ來つた時、私達は日本にどんな學生を見なければならない事でせう。そこにあのカフエー問題があらうとは。今の所彼等は、インテリゲンチアーといふ名稱にすら恥かしい、一種のアミーバ的存在に過ぎぬ觀がありはしますまいか偶々そこに起る運動も乾度様々な個人的な不純さを持つた、不快なものである場合が多い。

今の私達の世の中はそれ程泰平な世の中なのでせうか。

私は此の文を草し終つて、これに對する何人か、男學生の烈しい抗議の一つでも見得たらばと、思ふ事頻りである事を、付加せずにはゐられません。

（二十六頁より）

無料病院が到るところの村落にまで普及して、病者はすべて親切に取扱はれ、天授の壽命だけは、すべての人々が完ふし得るやうにあつてほしい。

八

以上は、此の世に生を享けたる一社會成員としての私が、社會生活の一般原則として要求するところの綱目であり、同時に自治市民の、自治農民の、非政黨的團結が若し成立するとすれば、その要求として、恐らく持出されるであらうと推測さるゝところの綱領でもあるのである



職業婦人の社會的地位

川原次吉郎

×

資本主義經濟社會は、女性をも、家庭から引ばり出して、工場へ或は商店へ誘き寄せる。それは婦人は家庭にあつて、靜かに臺所の管理をしてをれば澤山だ、女の身で、世間に出て活動するとはもつての外の不貞事だ、といふやうな思想の一般に行き渡つてゐた我國にも、資本主義といふものが起つてからは、その從來の社會觀念を打破して婦人をも戸外に出さずにはをかなくなつた。舊式なる保守主義者にとつて、何が皮肉だといつて、これくらい皮肉な現象がどこにあらうか。

×

茲でもう少し、そのことについて説明しなければならぬ。

資本主義的生産組織が社會の一制度となつてくると、その必然の結果として、資本その他の生産機關を所有するものと、それに對して、單に勞働を賣つて生活を立てて行かねばならぬものとの、二種類の階級が、自ら生ずるのである。そのことは、經濟學者が十分に科學的正確さを以つて説くところである。

そして、この中で、後者即ち勞働階級に入つた

ものは、もう一生涯浮かぶ瀬が無くなる。どんなに逆立ちしても、眠る目もねないで働いても、資本階級に入ることは出來ない。賃銀一日いくらでしばりつけられてしまふからである。かくて、『かせぐにおひつく貧乏なし』といふ諺は昔の夢で、今は石川啄木の歌にもある通り、『働らいても働らいても、我がくらし、樂にならざり、手をぢつと見る』といふやうな、ことが、現實の社會に對する實に雄辨なる説明になるのである。

さういふわけで、今日では、貧乏人はいつまでも貧乏人である。自分一代ばかりでなく、子も、孫も、貧乏で苦しまねばならぬ。金持ちの子弟は働かずとも金持ちであり、社會的に優勢な地位を得て行くことが出來る。

貧乏人は、そこで、どうしたらよいか。生計を維持するたゞひとつの道は勞働を賣ることより外にない。それで得た一定の賃銀で、一家を支へて行かねばならないのである。もちろん、それでは足りない。主人一人の收入で一家を支へることは到底困難である。これほど、そんなに勞働賃銀は低いのである。そこで、主婦も、息子も働らいて一家の生計をたすけねばならなくなる。家族が多かつたり、主人が夭折したやうな場合には、娘でも子供でも、もう死にものぐるひになつて、一家總動員で働かねばならぬといふことになる。かうした家庭から多く職業婦人が出ることは、事實が何よりも明瞭に證明してをるのである。

×

もう一つ職業婦人を多からしめる充分なる理由がある。それは、婦人は、賃銀が安いといふことである。資本家の立場からいへば、勞働者に支拂ふ賃銀も一つの資本である。生産の資本を能ふ限

り安くすることは、營利の目的にかなふ。そしていふまでもなく、資本主義は營利主義であるから出來得る限り安い資本によつて生産せんとする。男子の勞働賃銀は、婦人のそれよりも高い。であるから、若し仕事の性質上、婦人でも間に合ふものであれば、男子よりも婦人を雇つた方が得策である。そこで、幾多の方面に婦人の勞働者を要求するのである。

そして、前述の如き原因によつて、收入を得んとする婦人が、それに向つて求むる道を進むのである。

かく考へ來たるならば、全く、今日の職業婦人の出現、增加は、資本主義下の當然の現象であることが明かとなるであらう。

×

けれども、婦人の内心には、矢張まだ、職業につくことをはづかしがつたり、きまり惡るがつたりするものが多い。否、出來得べくんば、早くその苦界からのがれたい、といふ希望を持つものが多い。『勞働は神聖だ』と敎へる人がある。けれども、現在の世の中では、どうかんがへても、勞働は神聖になつてゐない。勞働そのものを樂しみ、それを人のつとめとして喜こんでなすには、あまりに、現代の勞働は苛酷である。神聖どころか、實に苦しい、厄介な、そしていやなものである、といふ見方の方が事實に近い見方であると私は信ずる。否、私自身の經驗からもそれを云ひ得る。『勞働は神聖だ』はうそで、實は『勞働を神聖なものとしなければならぬと』いふのが、本當ではなからうか。

で、誰も今日の勞働者は、婦人にしろ、男子にしろ、同じく、勞働をあまり愉快なもの、ありが

たいものとは、思つてゐない。たゞ生きて行かねばならぬから、その唯一の道として、否應なしに勞働するのである。しかし、勞働出來る間は、まだしもよい。資本主義社會に必然の現象たる不景氣、それにつきまとふ失業といふ現象は、勞働せんとする希望をさへ奪ひとつてしまふのである。

それは又、別の機會に論ずるとして、兎に角、職業婦人は、自分のやつてゐることに、少くともほこりを持つに至つてをるものが少ない。そこで仕事に腰がすはらない。機會あらば足を洗はんとする。こゝに於て、資本主義制度は更に一つの風習を、うまくこしらへ上げる。それは、職業婦人のほこりをもりたてることである。即ち、相當の俸給を與へ、衣服料や化粧料等の補助をして、許す限り美しい服裝を可能ならしめる。そこに淺はかな女性の虚榮心は動く。丸ビルの女事務員が、多くの無産子女の憧憬の的になつてをるといふことは、しばしば耳にすることであるが、田舍などには紡績工場の女工が、女學生まがひのユニホームをひたすらにあこがれて、應募するものもあるといふことである。かくて、小婦人の一時的な、そして淺薄な虚榮心は、幾分滿足されるにしても、しかし、その胸の奧には、矢張一沫の哀寂を感ずるといふことは、多くの婦人雜誌の所謂告白記事の上に現はれたところによつても知ることが出來るのである。

×

かくして、職業婦人の間にも、だん／＼、自己の社會的地位の如何なるものかの自覺が出て、境遇に對する疑念を抱くに至るのである。今日、職業婦人中の先覺者といはれる人々は、こゝに最も早く目ざめた人達である。同じ女性でありながら

一方には、自働車を帝劇や三越に走らせ、社交界に出て、華かな歡喜に陶醉してゐるかと思へば、一方には、赤子を背負つて荷車を曳く、憂へ顔の憔悴した勞働婦人がある。はなやかな女流運動選手などになつて、もてはやされて、得意になつてゐる少女があるかと思へば、寒空に疲れた聲を張り上げて夕刊を賣るけなげな乙女がある。これを想ひ、かれを考へてみるところに、どうして、疑ひと不安との念が生ぜずにゐられやう。

かくて、ものを、眞劍になつて、自己の立場を見つめやう。全てを根本的に考へ直してみやうといふ、眞面目な傾向が、少數ではあるが、すぐれた頭、敏感な胸の婦人の間に、現はれて來たことは、何の不思議もないことである。私は、日本にもこの傾向が、しかも割合にはつきりと現はれ來たつたことを心強く思ふものである。そして、これらの傾向を辿る新婦人の思想が、先づ女性の社會的の地位、及び、その經濟的地位の探索に初まり、つひに、女性の勞働的乃至職業從事は、社會進展の必然の結果であり、單に女性としてなく、一の人間としての立場から、最も望ましきことであることを知り、從來の多くの職業婦人の考へ來つた勞働觀、職業觀とは、全然異つた、新たなる觀點に立つに至つたことを、ことの外喜こばしく賴み多く感ずる次第である。

×

イプセンが、『人形の家』のノラの口を通じて放した一大問題は、全ての近代婦人問題の緒論でなくてはならぬ。妻として、母としての婦人を考へる前に、人間としての婦人を考へ、それを通じて否それを含めて、初めて妻として、母としての婦人があり得ることに思ひ及ぶならば、イプセンの

一問題劇は幾度味はつても足りない大なる敎訓を現代女性に與へてをるものといひ得るであらう。
かくの如き意味からしても、現代の自覺せる職業婦人が、尊い主張と實例とを、身を以つて生活してをられることに、畏敬の念を禁じ得ないものである。そして目覽めたる男子も亦、その傾向に共鳴してをるといふ實證を、いくつも私は知つてをる。名前は、ちよつと遠慮しておくが、日本有數の金持ちの華族の若樣が、家人の禁止もしりぞけ、敎への君の忠言にも逆つて、一人の若い然し現代の空氣に生きつゝある新進の一牧師の賛成だけを得て、斷然相思の一看護婦と結婚した。このことは、知つてをるものには可なりの感動を與へた。が、併し、彼等二人は、父祖の富を文字通り弊履の如く棄てゝ、己れの暮しを立てる生活に入つたのであつた。勞働に對する新しき觀念、それはやがて新社會を導く一里塚であるのだ。職業婦人の勞働觀は、かくて漸次變り、今や小數ではあるが、勞働を人間價の唯一の與件として、これに從ひ、又貧乏の社會的意義を知り、富有の社會的性質を自覺して、貧故の勞働を、却つて一のほこりとをさへ感ずるに至つたのである。

×

職業婦人中の自覺せる人達で組織され、經營されてをる團体も出來てをる日本現婦人界に、私はもうしばらくの內　愛憎をつかし、失望をすることとを止めやう。そして、注意深い學究者の態度を以つて、それら婦人團体の行方を、眺めてゐやう



失業日誌

山田好子

○月○日

F社のSさんからお斷りの手紙が届いた。もう一月半も前の事だつた、F社で婦人記者を募集して居る事をOさんがお知らせ下すつたのは。私の希望は初め新聞記者に成る事だつた。

それには色々理由があつたが、私共の思想が常に空理空論に走りたがる、私達はもつと、實社會にゝじんだ仕事をしなければならない、社會の實相を知らなければならない、それには、新聞記者に成る事は最も適當なものであらう、といふのが最も大きな理由だつた。もとより、生活の資を得る爲に職業を求むる私としては、何事も社中心に働かなければならない事は覺悟して居たのであつたが、しかし私の希望は、たやすく社會に入れられるものではない、若しF社の樣な所に入れるとしたら、雜誌社も亦結構である、文才もなく社交家でもない私など、元より始めから一人前の待遇を受け樣などゝ思つても居ないが、それにしても、先頃社で婦人記者を募集した時、二百八十人も應募者があつたといふ噂を聞いてゐたので、どうせ駄目だらうとは思つたが、思切つて應募したのであつた。

其後友人のNさんもF社に應募したといふ話が出て、Nさんは、しきりと、何だかあなたと競爭でもした樣で不快ねーと繰返してゐたが、其後暫らくして、Nさんの處には、お斷りの手紙が屆いたといふ事だつた。誠に結構なのですが、社としては今少しおてんばの人がほしい、が、あなたは他の社にお世話しやうと思ふから社に來る樣にとの事であつたといふ。

『先頃はS社に應募したが、うまくメンタルテストに掛つてねー』

そう云つてNさんは笑つて居つた。

貴方の樣な人を使はないなんて、使はない方が損するわ、私たちはいつも、そういつて居つたのだつたが、Nさんは、F社の婦人記者として、いま盛んに活動して居られる。そして私は、F社の事などもうすつかり忘れて居たのだつたが、今突然お斷りの手紙を受取つたのだつた。今回はどうかお見合せ下さいといふ、ごく簡單なものだつた。

有島さんのお家を自分の家の樣にして出は入りして居た、と云つて、Y先生は、よく同氏のありし日の逸話など聞かして下すつた。其お言葉の中に、先生はかつて、『美貌で僕をまどわして原稿を書かせやうとして居る婦人があるそうだが、そんな事で』などと云つて居られたのですがねー、と追懷して居られた。婦人記者生活、それには、そうした反面も亦、成功の一因となるのではあるまいか、世の中の至る處に暗い影がさしてゐる。

〇月〇日

もう、のんきにかまえては居られない、三月一ぱいは遊ぶ氣だつたのだけれど、四月の日もつかの間に過ぎて仕まつた。賴んだ程の人は、皆、盡力しませう、と心持ちよく引受けて下すつたけれ

ど、『まだ女の方が就職難が少ないのですよ』とF先生も心強く云つて下すつたのだけれど、今日迄何のおたよりも戴けないのは、やつぱり、適當の處がないのであらう、お忙しい方を度々訪問するのも心苦しい事だし、外の方面、第二志望の方面を當つて見やう、社會敎育に熱心なSさんを訪ねて見るとしやう、Sさんは工場などにもよく出は入りして居られる、或ひは適當な仕事が無いともかぎらない。しかしSさんは先頃、工場などでも女の人を入れて良い成果を得られなかつたためにこりて居る樣な向もあるやうです、といふやうな意味をもらして居られた。

　世の中の人は餘りに俠慮の樣に思はれてならない。さきごろ或人に、N省などでも、女の人がいつも期待にそはない事によつて、もう婦人は心要ない、と云つて居るといふ樣な噂を聞いた事があつたけれど、長い間良妻賢母の美名の下に幽閉されて居た女性、家庭以外に廣い天地を知らなかつた女性、それがにわかに廣い世間に飛び出して、豫期した效果を舉げ得ないとしても、それは決して女性自身の責任ばかりではない筈であらうに。しかも、十指を屈するにも足りない少數者をもつて一般女性を律するとは、何といふみじめさであらう。それにしても、先覺者、開拓者の責任は重い。

　夜、フクフの內職に取かゝる、私はお裁縫はお得意であつた。そして、大丈夫、失職したらお裁縫で喰べて行ける、といふ自信をさへもつて居つたのであつたが、之を本職にする事は何としてももの足りない事だつた。しかししばらく止めて居ると、どうしても裁縫の內職に掛る氣には成れない、殊に今は最も時期が惡い。さいわい、印肉屋の親戚からフクフの縫縫ひを內職にする人はあるまいか

と云つて來て居たので、遊んで居るより少しでもやつて見やう、夕食が濟むと夕刊を飛讀みして、セツセと手を動かした。オブラート大の布のまわりを一分の縫代縫でふだけの事、何の練習も技倆も入らない、しごく、簡單なものだ。しかし一晩かゝつて出來上つたのは、やうやく百枚位のものだつた。百枚の工賃十五錢位との事、之だから內職をするより飢ても本でも讀んで居た方がいゝといふ事に成る。しかし朝の食事が一碗もないと云つては、心配してくれる母、夕食事に歸宅しないと十時迄も、十一時迄も食膳をとゝのへて待つてゐてくれる母。月末に成れば米屋、酒屋、大家、電灯料よ、瓦斯料よ、と遠慮なく大軍がおし寄せて來る、氣の小さい母が、オドオドしながら斷りを言つて居るであらう姿を想像する時、やつぱりぢつとしては居られな。

○月○日

TさんがT保險會社をよされたといふ事を聞いたつい近頃こそ、Oさんから大變都合が良くつてよろこんで居られるといふ事を聞いたのに。私は、保險會社の外務員として成功するのには、Tさんはあまりに純であると思はれてならなかつた、とうとう行き着く處まで行かれたのだ、といふやうな氣がした、二人の病人をひかへて居られるTさん、そして強い樣でどこか弱々しい處のあるTさん、体もごく壯健ではなさそうなTさんに、いつも同情はして居るが、かげながら思ふだけの事、何等盡力する事が出來ない。

このごろ、十年近くも働らいて居つた處を辭したといふKさん、京橋の或社で、若い事務員を尋ねて居るといふ事を聞いたので早速紹介する。多分入社出來るであらう、俸給は少々安いけれど、

此不景氣では止むを得まい。今迄にくらべれば三時間も勤務時間が短かい、これだけでも一進歩であらう。

どこに行つてもどうせ、氣に入る樣な處はありませんよ、今度は氣に入らない事があつても決してタンカ切るんぢやありませんよ、世の中は圓曲に渡らなければ損ですよ、なんて、ばかに姉さんぶつてあとで笑可しかつた。

○月○日

今日T社に行く日であつた。といふのは、先頃良い廣告もがなと時事新報を讀んで、案内欄を見ると、珍らしくもT社の婦人事務員募集廣告が目に入つた「志操堅實なる婦人履歷書送れ、面會日通知す」と云ふのだつた。事務には多少自信をもつて居る、大きな社らば、又機會をつかむ事も出來やう、そう思つて履歷書を送つて置いたのであつたが、今日午後一時來社する樣との葉書が昨夜屆いたのであつた。

遲刻するのも不快だけれど、どうせ今日は志願者が多數參集して居ることであらう、知らない處に行つて、店ぶるしの人形みたいにづらりと並ばされて、ボカンと待つて居るのも氣がきかない、と云つて、パンの問題は差し迫つて居る。時間を計つて家を出たが、途中電車の事故でとう〳〵三十分遲刻した。先づ中老の受付子が來意を問はないで『葉書持つて來ましたか』と一蔑を送る、先頃送つて置いた履歷書に赤い番號をうつたのをもつて、給仕の少年が三階の一室に案內してくれた。そこにはもう六七人の先着者があつた。思慮深さうな婦人、七三、耳かくし、樣々であるが概して年齡は廿四五歲以上らしく見えた。先着順に一々口頭諮問を受けるのであつた、かなり長い時間待た

されて、ついに私の番がまわつて來た。私は一々眞面目に、謙遜に答へたつもりだつた、あなたは獨身主義ですか、と聞かれた時は、何だか時代ばなれのした樣な感じもしたけれど、試驗官は中々わかつた紳士だつた。

『あなたは珍らしく職業意識がはつきりして居られる、ところが、社の方では、決して婦人の特長を認めて使はふといふのではないのです、むしろ弱點を認めて、といふのは、女の人ならば給料が安いとか、コツ〱機械の樣に働く事にも不平を云はないとかいふ樣な處にあるのです。私一個の考へとしては、行く〱は婦人も主任級にも引上げたいとは思つて居りますが、それも私一個の考へではどうする事も出來ない。そんな譯ですからあなたにはとても辛抱は出來ないでせう、あなたは相當に勉强もして居られる樣だし、阿方の問題は又別個の問題として考へて見たいと思ひます』と云ふ事だつた、私はこゝでも又体裁よくられ斷たのであつた。しかしこうして理解の下に斷られる事は少しも不快を感じなかつた。ともすれば重役等の興味中心から、多くの事務員志望の婦人を集めては、買女でも決定する樣な態度で詮衡するなど、不都合な話も良く聞いたものだつたが……

○月○日

N省にY氏を訪ふ

『阿方の事も兼々聞いて居ましたので、色々心配して居るのですがね—』と思慮深さうにいはれた。

『もうどこに行つても人があふれて居るのですからね。たまたま、女の人の口はあつてもとても、喰つて行けないんですよ、何か新らしい仕事でも始めなければ仕方がないのではないかと思ひます外にも、是非お世話しなければならない御婦人が

三四人ありますがね。どうです、何か始めては、消費組合か生産組合の様なものでも、及ばずながら資金や何かの事は何とか奔走もして見ませう、S社がウマク行つて居る例もありますが、れこは一種の生産組合ですね―、どうしても消費組合を成功させなければ駄目だと思ひます』

こう仰言るYさんの瞳には熱がこもつて居る。

消費組合については随分考へた事もあつたけれど、私は結極、こうした大都市では成功を收める事は困難なのであらうと云ふ結論からとうとう思ひ切つて仕まつたのであつた。今東京に、一二の組合はあるが、うまく行つて居るのであろうか。

『無自覺な、そして安逸になれて居る都會人。御用聞きの手によつて、その日その日に思付(おもひつき)の品物をとゝのへる事の出來るのを何よりの便利として居る都會人、目方が少なからうが多かろうが、價が高くつても、品が惡くつても、少しもおかまいなし、月末に取まとめて代金を支拂ふのである。金のある人は、一々支拂ふのは面倒だと云ひ、金の無い人は、是非御用聞き制度によらなけれ

カルピスの辯

むめお女史が蒼こう關西の講演旅行にたつて行つたあとへ、風來的に罷り出た愼六は、めぐり合はせの惡い奴だつた。來るや否や須藤氏にとつつかまつて、埋草を書けとの御托宣だ。然し珍しい話でカルピスを御馳走して呉れろといふし、左右に失職美人をひかへてペンを取つた以上、愼六たるもの卓勵風發せざろを得ない。ペンよ走れだ。

さて讀者諸姉よ、暑くなりましたな。凡ゆるもの、溌溂たる若さが、絢爛な太陽の下で喜びにふるへる時だ。あまり使いなれない片方の眼を開けて、此の惡でつかい都會を見ると、お綺麗な御婦人方や、もつたいなげな殿様方が、狂躍亂舞に汗をかいてゐる。何だか太陽まで一緒になつて汗をかいてる樣ですな。我々貧乏人は太陽まで彼等に獨占されたやうな氣がするぢやねえか。

今も池袋の方を通つて來たら、あのあたりは隨分結構な土地になつたものだ。東京の郊外に行くと何所もさうだが、あすこいらにも文化的奥さんが澤山居る。

ば、一月をしのぐ事が出來ない、こうした墮性になれた都會人、私はそこにいつも失望するのであつた。私は消費組合の必要を痛感してこそ、考へても見たのであつた、うまく成功すれば生産行程に迄入つて、失業者を收容する事も出來やうなどゝ考へた事もあつたのだけれど、やつぱり私の熱が足りないのかしら、今一歩研究して見やう。

○月○日

音樂會の用件でＳ先生を訪ふ、ついでに就職の事をお願ひする。

『そうですねー去年迄は、時々人を尋ねられる樣な事もあつたのですがねー此頃は絶對にありませんよ。今一ついゝ口があるのですが、之は月給も三百五十圓位は出すといふのですけれど、特種の技術が要る事だし、女の人では駄目なんですよ』

女性はいつも、ひもじさをがまんして見て居なければならないこゝでも又、女性の生存權の薄弱さを見せつけられたのであつた阿方方には色々いゝ傳手があるでせう婦人會の方など、とも云はれた。時々色々な人にそうした事を言はれるけれど、私にはどう

文化住宅、文化的施設、文化的奥さん、曰く何、曰く何悉くこれ文化的で、みすぼらしい我々は、さんざ肩身の狹い思ばかりする事だ。

一体文化的奥さん或は旦那さんのお歸りまでは、一日中さぞ暇な事だらうが、何をしてござるのかな。奥さん達よ、おめえさまつちは暇があるにちげえねえから、昔い坊主共のやうに、𡈽つたお學問するなり、眞面目に人間の生活を考へて見るなり、めいめいよの中で生かして貰つてるだけの事は、やつて見たらどんなもんだい。さうする事によつておめえさまの旦那も、少とづゝお人間らしくなつて來まいものでもなからう。見なせえ、お前さまつちの旦那が往來を歩いてる所を。どれもこれも、さんと洋服が人間を着て歩いてるさしきや見えねえ。今に魂に逃げられて、風が吹いたらひいらひらと飄るやうになるぞ。どれもこれも。

何か、そんなら男はどうだつて。いふ勿れ文化的奥さん達よ、死人は死人をして葬らしめよさ。

などゝおい愼六よ、いやにしやちこばつて喋舌くるな。貴族富豪の奥さん方の

も、同性はこうした問題に對して、たより無く思へてならなかつた。第一、今の女性の地位は實に貧弱なものである。先頃東京市の調査によれば、職業婦人の最高月給、百圓內外といふ事であつたが、之だけでも、婦人の地位を十分察する事が出來やう。それに所謂(いはゆる)知名の婦人など、多く失業の問題、飢か生かの問題などは容易に理解が出來ないのではあるまいか。そして婦人は、どうも個人主義の樣に思へてならない。學校で哲學演習の時キットの思想を講義されて居つたが、キットは、口を極めて女性を讃美した。ショーペンハーワーの女性觀を引用して、女性は個人でない、種族人である。女性の夫に對し、子供に對する犧牲生活は實に貴重なものである。集團的新社會に最も適合するものは女性であろうと云ふのであつた。

しかし私はそれに對してく多の疑問をもつ。女性の犧牲生活は消極的自己本位のものゝ樣に思はれてならない、私はキットの女性觀に就て、と題して試驗論文を少し書いたのであつたが、其後其講師に會ふ機會もなく、何等の批評もなかつた。先生は猶云は

間には、咽喉梅毒が流行しやうつて世の中だ。まことに死人は死人をして葬らしめよさ。

…愼六…

どんなとこでもいゝのだが金がない
貸間さがしも亦なさけない。

たるえ

『活動寫眞見に行くべえやあ。』
と野孃の二三人が田植のすんだ野良道を連立つて饒舌ろ。
螢の出かゝつた農上り休日の夕べだ。

龍うつて

買つた晴衣の裾をアユに血を吸はれた赤黑い脚で蹴返しながら。

劍二

貧しき者と貧しき者とあひつどひ
酒くみかはす今宵ながかれ

仁

れた。『男だつたら、今相當な地位に居る樣な人でも、一回や二回は失業のうき目を見て居ないものはないのですよ。だから大きな處で相當な地位に居る人だつたら、一人位、何とか都合を付けると云つた樣な調子ですね――』と。

しかるに女性は實に卒直である、それが道德律として貴ふべき事であつても、現今の社會は、何事も裏から裏で解决される世の中である。女性は融通がきかない。馬鹿正直だなどゝいふ聲も、そうした意味から發せられるであらう。殊に私は、大馬鹿正直だ、これ位融通のきかない人間も多くはないであらう。私は歸途電車の中で取止めの無い思ひに耽つた。

Ｉさんが M社に入社なすつた、隨分方々から紹介狀などもらつて、骨折つて入社したのですよ、とい ふ噂も聞いたものだつたが。やつぱり有力者に頼み込まなければパンを得る道はないのであろうか。それにしても融通のきかない私は、有力者知名の士などにし少も知人がない。鎖された婦人職業の道をどうして開拓したらいゝであろう。一般女性には、やつぱり家庭勞働が一番適當なのであろうか。それにしても、家庭に安住する事の出來ない、多くの無產婦人が、二重三重の桎梏を負ふて居るのに、何等かへり見ない世の中を何としたらいゝのだろう。

社會成員としての要求

下中彌三郎

われ／＼が社會の一成員として、自分たちの衣食住の安定を希ふ一念から、社會生活の公正を制度の上に要求するならば、差當り次の數ヶ條を數へることが出來るだらうと思ふ。

第一、土地の公有。
第二、村落工業の普及。
第三、天然利用事業の公營。
第四、國際軍備の徹底縮少。
第五、徵稅組織の單純化。
第六、敎育の機會均等。
第七、無料病院の公營。

一

土地の公有といふのは萬人有の意味で、普通にいふ土地の公有とは少しく意味を異にする。國有地といへば、直ちに官有地といふ觀念とに結びつき、役人支配を思ひ起させるが、公有とは自治鄕土の共同所有の意味で、部落町村有、及びすべての團體有を包括させるといふ意味である。

實際問題として、農村土地の配屬事情を考へて見る。甲の村乙の村、丙の村、それ／＼に、自作者あり、小作者あり、そして地主がある。地主にも大小があり、耕作するものもあるし、全く耕作せぬ者もある。耕作せぬ地主の中には、その鄕村に居住せずして都市または他の土地に居住して居るものもある。

そこで、第一の要求は、『わが鄕邑の土地を我が鄕邑のものに』することである。

次に、耕作經營はどうするかといふに、これは私營と公營を並行させるがよいと考へる。假りに一村落における他町村地主の所有地が偏理的の方法によつ

てその村落に歸屬する場合があつたとする。この場合には當然それは神社有（宮田）寺院有（寺田）學校有（校田）等の形で歸屬するであらう。かゝる耕地は舊小作者に小作さす場合もあり青年團などで團体經營する場合もある。何れにせよ、それよりあがる收益を以て村落公費負擔に充てることにする。

二

村落工業を如何にして普及すべきか。はた如何なる種類の工業を營むべきか。如何なる方法によつて農業と工業を關係せしむべきか。具体的には地方々々の諸事情によつてそれ〴〵異なるべきは勿論だが、可能なまた必要な事業の種類を總括的にあげて見るなら、

農產製造業―製絲、精米、燻肉、製餡

肥料製造業

染色織物業

農具製造業

日用品小工業―マッチ、石鹼の類

木材竹材關係工業

等であらう。水力電氣の得易き我が國では、電力に依つて耕作をする事も不可能ではないと言はれてゐる。して見れば、工業動力の普遍と相俟つて、村落工業は決して不可能ではないと思ふ。

經營は、生產組合の事業として行ふことにすれば、小規模の工業設備位は、必ずしも不可能ではあるまい。

三

まづ、炭坑、金屬鑛、油田の類を國有化し、公營化することである。「何人も地球上のある場所において、他人より多くの權利をもつ道理は所在せぬ」とカントも曾てその法理論において言つたが、天然資源萬人有の原則は、如何なる理由からも否み

難きところである。

つぎに、水力事業の國有化公營化である。先願權によつて天然資源を私有獨占する如き制度は直ちにこれを改めなくてはならない。

漁業權もまた然りである。

ただし、坑鑛、油、水流、森林、漁海の類を國有化公有化するにしても、その近接地方民の生活をこれがために奪ふ如きことがあつてはならぬ。

同時に、耕地、牧地、山林の如き、すべてこれを鄕邑的公有とすべきものもまた、それの全國民的或は全人類的性質を十分考慮しなくてはならぬ。地租はこれを地方に委讓すべきよりは寧ろ國費の重要なる一要素たらしめねばならぬ。

四

國際軍備の徹底的縮小―軍備は、能ふべくんば全廢すべきである。少くとも日本の現狀にあつては、日本の陸軍は長物である。日清戰役前の程度で澤山である。農村疲弊の重大なる要因が軍備の增大にあることいふまでもない。

五

租税をとりたてる組織の單純化は税務官吏の失職者を、一時的には夥だしからしめるか知れないが、それだけ、生産勞働者を多くし、それだけ徴税吏の警察化を拒ぐことにもなる。

酒、醬油、煙草、織物などは農民の自作の自由が許されていいと思ふ。農村が疲弊するのは、米や麥を作りながら、そしてそれを安く賣りながら、それらから作つた―酒、醬油―を驚くべき高價に買はされるからである。見給へ、釀造家の素晴らしい繁榮さを。

ゴマカシの利く、骨の折れる不公平に陥るおそれのある所得税などもやめたがよい。

坑業、鑛業、水力業、林業、農業、漁業の如き單純にとりたてることの出來るものから國費の資を得れば澤山である。右の中、坑鑛、水力事業の如きを國營または公營とすれば、それの收益を國費に充つることになるこれによつて、鐵道運賃や郵便電信料はずつと安くても國費は十分に支辨せられるであろう。

徵税組織が現在のやうに複雜では、徵税費を夥多ならしめ、そこに驚くべき自殺作用浪費が行はれる。況んや、役人が國民を疑ふ、疑はざるを得ないやうな制度は、淳良なる風俗、善美な秩序を破壞することおびたゞしい。

六

貧乏、それ故に無學、それ故に社會の下積(したづみ)になる、つまり、貧困、無學、下積この三つが、今日のやうにピッタリと絡まりついてゐる制度は、一日も速かに改めなくてはならぬ。學習權確立の必要がそこにある。小學から大學まで、全國民に、平等に教育を受くる機會が保障されるのでなくては、國民能力の總動員を行ふことは出來ない。何人もこの世の中に生を受けたるものは、一樣に文化饗宴の席に列なる權利—生活權の一部—をもつてをる。教育の機會均等の必要がそこにある。今日のやうに、貧乏人が消費税或は生存税の形で負擔してをる國費によつて、金持の子達が大學、高等專門の教育を受ける、その教育のおかげで、貧乏人を更にくるしめるといつた風の制度—かうなつては、教育制度は、明かに搾取制度の一變形だ、事實、今日の教育はその通りである—は一日もこのままにあつてはならぬ單に入學が何人にも許される、貧富、男女、老幼の別なく入學する自由がある、といふだけで

は、完全な機會の均等ではない。無月謝、學用品の公給、貧しいものゝためには衣食の給與まで社會的に保障せられるのでなくてはならぬ。

この立場からすれば、現制の大學制度は直ちに廢止すべく中等教育完了―約十八歳―までを普通教育期間とし、それ以上は、全然自由大學の制度にならふべきである。中等教育の期間と雖も、現制度の如く上級學校への足場であるやうな教育法ではだめ、生産生活の準備としての教育、正しい意味の勤勞學校であらねばならぬ。

七

所屬社會のおの／＼の成員は、その所屬社會全員の好意によつて、互ひに助け合ふ社會でなければ眞の意味での『社會』と言ひ難い。

社會の成員は、今日でも何かの意味で社會的勞働に服してをる。しかし、大多數の無産者は社會的扶助を受くる機會が極めて少ない。

有産者は、今の時代に與えられる限りの文化的施設を利用することが出來るから、病魔におそはるゝことがあつても、あらゆる方法によつて治療し得る。神に授けられた生の限りを貪り生きる。これに反して、無産者の殆んどすべては、一たび病魔に襲はれたが最後、そのまゝで死の手に身を委ねる外ない。醫師に手を握つても貰はず、藥一服飲まないで、場末の貧民町のジメ／＼した陋屋で死んで行くものが、今日決して少くない。それほどでなく、一應醫師をもよび、藥をもらふ程度の人々と雖も、醫院に入り得ず、高價な藥を用ひ得ないことのために天授の壽命を完ふし得ぬ例は限りなくある。

（以下五頁へ）

遠地近地

農村の女の生活

加藤夢想

私は山間僻地に住む貧弱な、そして薄幸　一青年であります。……私の地方は交通不便な田舎ではありますが、青年たちの多くは、階級的意識にめざめてゐるとでも云ひませうか。勞働問題や水平運動その他の社會問題の研究に熱心なものが多くあります。私はこういふ傾向に對して常に喜びを感じてゐる一人であります。

然し、青年たちが階級的　目醒めつゝある割合に、婦人たちの自覺程度の非常に低いのを嘆いてゐる次第です。これは婦人が家庭から一歩も外に出ず、只家の中にゐて家の中の仕事におはれてゐるためだと考へます。又、青年達のやうに、時々集つては、演説をしたり、お互ひの研究を發表しあつたりする機會がないためでもあらうと思ひます。そのために、一人の自覺した婦人があつたとしても、その人ひとりに終つてしまふのではありますまいか。これは、是非とも同志を叫合して婦人の會を作らなくてはならないと思ひます。

一体、農村にあつては、職人は別ですが、婦人も共稼ぎしなくてはならないのです。農村にある婦人は、そこいらの職業婦人よりは、むしろ、ずつと苦しいものです。職業婦人なら、ある會社なり、商店なりに働いてゐれば、雇主の支拂ふ賃銀は不當に安いのは事實でせうが、とにかくそれだの賃銀が支拂はれますが、農村に働く婦人は、家庭さいふものにその身は束縛せられて、無報酬で働かなくてはならないのです。但し、生活の安定は、職業婦人よりは確かださいふ点がありますが。

然し、人間の勞働といふものは、そんなに安いものではないと私は信じてゐます。一人の人間が働いて、やつと飯をくふだけの價値しかないさいふものではない筈だと信じます。(その日その日のパンにも追はれてゐる者も少くない、否、大部分はさうであらうが)私たちが勞力を賣つて米を買つて食ふとしても、そこには煙草銭位は殘らなくてはならない筈だ。又着物も必要だし、その他小使錢がなくてはならぬ。

農村に働く婦人さしては、食ふ事と着ることだ　は安定でありますが、雜誌やすきな書籍を買ふだけの餘裕は一厘もないのです。而も農家には時間の制限がないのですから、朝早くから夜おそくまで働かればなりません。たとへ一冊の書物があつたとしても、讀書するだけの時間の余裕が出て來ません。かうした境遇にある農村婦女子の自覺が割合に薄いのはよく考へなくてはならぬ問題であらうと思ひます。

統計の皮肉な鉢合せ

山崎剣二

統計が皮肉なのか、それとも人間の尻癖が皮肉なのか、靜岡縣の御役人がセッセと編み上げてくれた縣勢要覽の統計表の中で、面白い鉢合せが有るので引っぱり出してごらんに入れる。

酒と女、そうした野獸的肉慾の滿足機關たる社會の暗黑面……でも、それを信仰する連中には美くしい花柳の巷なんだが……その數と、人間を育して、人格識見を高める中等程度以上の學校の數とを先づ鉢合せさして見ると、

中學校……七

甲、乙種實業學校……一九

大正十年四月調べ　計二六校

女郎屋　一〇六

藝妓屋　四三六

待合　一〇

貸席　一一

芝居茶屋　五

大正九年調べ　計五六八戸

驚くなかれ、遊蕩機關が男子教育機關に倍すること二十二倍弱。

今度は、女子の教育に當る可き高等女學校と實科女學校と比較して見やう。

高等女學校　一六

實科女學校　五

大大十年調べ　計二一校

女學校に倍すること二十七倍強。

では、その中等教育を受けつゝある生徒の數と、毎晩この暗黑面中に沈淪して鼻下の長さを計って貰ったり、鼻毛の數を讀んで貰ったりする遊野郎の數を比較して見ると、丁度赤ん坊と出羽ケ嶽位の差がある。

中等學校生徒　三、二〇三

各種實業學校生徒　五、六五四

計八、八五七名

一夜の遊蕩兒數　一、三一九名強

一ヶ年を総計すると、大正九年度の調べでは、總計四八一、四六九名となる、人格の向上と、眞理の討究に書を展く者の數が遊蕩兒の數に比して馬鹿に少なすぎる。

それから今度は、女子に婦道を說き、女の教育を授ける女學校教員の數と、男子を墮落せしめ自分自身も又腐敗のどん底に沈んでゆく賣笑婦の數とを比較して見ると左の通りだ。

高等女學校教員數　一八七名

實科高等女學校教員數　四七名

大正十年調べ　計二三四名

娼妓數　七〇八名

藝妓數　一七一五名

酌婦數　三二三五名

大正九年調べ　計五六五八名

賣笑婦の數が教員數に倍すること實に二十四倍強、これを縣下女學校生徒総數六、六四九名に比してワズカに千名の差あるのみ。驚かざらんとするもあに驚かざるを得んやだ。それならば一体、これらの遊興費の総額と、中等教育費との比較　どうであらうか。

大正十年度公立中等學校經常費調査表

校名	金額	総額ニ對スル割合
師範學校	二二一七、八六六圓	一七%
中學校	二七三、五六八圓	二一%
高等女學校	三一六、三五七圓	二四%
農學校	二三四、四七一圓	一八%
工業學校	九四、〇三二圓	七%
商業學校	一六八、七五〇圓	一三%

總經常費百三十万五千〇四十四圓也

九年度遊興費百五十二万八千九百〇一圓也

一靜岡縣下娘子軍の紅裙に吸收される遊興費の總額が、一縣の公立中等學校の經常費総額を突破すること、實に、實に十六萬八千四百六十一圓也とは、鼻毛代ヨダレ代、アルコール代、秋波代、紙代枕代、總計正に百五十一萬八千九百一圓也。修養か遊蕩か、向上か墮落か、暗黑か、光明か、花柳病か眞理の探究か、大正のドンキホーテ有田音松の親愛なる同志は、かくて、花柳の巷に國輝を賑す譯だ。音松の國輝悲鳴は、この鉢合せから飛ぶ火華らしい。

同志をよびかけて

池田こぎく

教育といふ仕事は、丁度大佛がまりつきをしてる様な、そんな仕事だと、私は思ひます。

五尺にあまるからだをさげて、

『ハサミ　ガ　アリマス。モノサシ　ガ　アリマス。ハサミ　ト　モノサシ　ガ　アリマス。』『ト』といふのは、二つまたは、それよりよけいの物のあることを、一緒にしていふ時につかふ言葉で……わかりましたか。では『ト』をつかつて、何か言へないか考へてごらんなさい……出來たら書取』

なんて、あんまりなさけない話じやありませんか

教師の俸給は實に安い、と考へたりすることは勿体ない。教師の俸給なんて、他の社会人に比べて、實に高い。と、私はこの頃そんなことを、よく思はせられます。

こんなことをいふと、いかにも生意氣に聞えるかも知れません。しかし、それは私だけの感ではなくて、心ある教師なら、殆どみんなさうした感をもつてゐるのではないかと思ひます。その證據には、私ももう長い間教師をしてゐますけれど、

『今日は實に愉快だつた。よくも教師になつておいたものだ』

と、大口をあいて、腹の底から笑つてゐる様な、そんな同僚をまだ一度も見たことはありません。

一日の授業を濟ませた後で、ハンカチで汗を拭ひながら、ガブ〳〵と生水をのんでゐる樣な、そんな景氣のいゝ同僚なんて、恐らく一人もゐない樣です。

　こんな學校にゐる故で、隨分多くの先生方にもお逢ひしますけれど、どなたの顏を見ても、一先づシンシ張りをしなければ間に合はぬ樣な、そんなだるみを持つてゐる樣に思ひます。さういふ私の顏なんかも、よつぽど濃いのりでもしないと、人間らしい張りが出さうにないと、鏡を見るたびに、ほと〳〵さう思はせられるのですが。

　なに、人に負けてたまるものか、といつた意氣の出るのも若いうちの話で、二年もすると、もうちやんと、こつが解つて終ふものですから堪りません。それから後は、何といつても惰性、惰性、只惰性です。鐘がなるから教室に行く。時間割にさうあるから算術をやる。といつた鹽梅です。五年もすると『單調な生活には、すつかり倦きてしまつた』と、誰でも口說きます。

　これでは、教師の身体なんて、いつかはつきり皺ののび切る時はないと思ひますが、足の先から頭の先まで、一緒になつて喜ぶ樣な、そんな愉快は恐らくありますまい。そんなもので、何か變つた珍らしいことでもないものだらうかと、始終臭味に氣をくばつたりするもので、ある種の感覺だけが敏感になつてしまつて、他愛もないことを問題にしたがつたり、可笑しなことで腹を立てたがつたりしますが、これじや何といつても、大事な体を破滅させて終はうより仕方ありません。

　そんなことを思ふと、泪がこぼれます。

教育界は今、教授法だの學習法だのいつて、大分賑つてゐます、しかし、教授法だつて學習法だつて、つまり方法上の技巧じやありませんか。教へる必要があれば、教授しなければなるまいし、習はせる必要があれば、學習法でいかなければなりますまい。さゝやいていゝ場合に、どなつたのでは可笑しいに決りきつてゐます。

そんなことより私たちは、体のむづゝくやうな仕事をみつけなければいけないと思ひます。

せつせと働ける様な仕事はなし、働いたところがお腹もすかないし、生水一杯のみたいとも思はない様な、そんななまぬるい仕事の上で、教授法だの學習法だのいつて、地團駄ふんで見たところが教育も、教師も、子供も、一向に生きて來ないわけです。

『俺は學校で、手紙をかいたことがない』と、公私混同しないことを自慢する人が、教育界に大勢ゐる様ですが、二重生活者です。そんな人は、恐らく内へかへつたら最後、子供の顔なんて思出しもしないだらうと思ひます。

内とか學校とか、自分とか子供とか、そんな淋しいことを考へてゐたのでは、人間が消へて終ひます。

窮窟なこだはりや、的にもならないへ理屈は、きれいさつぱり放り捨てゝしまつて、この二本の足で、どつしりと大地をふみつけて、立ちたいと思ひます。そして、うれしい氣持で教育といふ職業に生き切つて見たいと私は希ひます。

團結だの、一致協力だのいふ言葉を、私共はよく使ひます。そのくせ私共の仲間ほど、小ぜり合ひをよくする仲間は、他の社會にはそれ程多くあるまいと思ひます。

責任なんていふ言葉も、隨分使はれてますが、そのくせ私達の仲間に、無責任な人が大勢ゐますといふのも、仕事がないからです。腕應へのする樣な、そんな仕事がないからです。餘り樂すぎるものだから、小ぜり合ひでもしなければ淋しくて生きれないのだと、言へるかも知れません。

今の教育は、人間を資格で裁く仕事の樣です。俸給で人間を裁き得るのだと思つてゐる樣です。餘りになさけないではありませんか。そんなことを考へたりすると、私は非常に緊張させられます

教育者の、轉任、病氣、といつた樣な場合に、よく有志の寄附をつのることのあるのを見ます。私達はなぜそんな屈辱を、恥さらしをするのでせう。なぜお互ひがお互を助けはないのです。同じ仕事に生きてゐる、天下の教師じやありませんか一椀の飯を分けてたべる樣な、そんな熱が、そんなうれしい行動が、なぜ私共にないのでせう。

一人一人が城廓を築いて、貝殼を持つて、その中に納まり込んで、『まああの病氣が、自分でなくてよかつた』といふ樣な顏をする樣なことでくだけ合つた親しみなんて、どこにもないじやありませんか。私は自分のさうした姿を眺める度に、力任かせに、自分のこの手で、自分のこの頭を、はり倒してやりたいやうな口惜しさを感じます。

硬化、硬化。私共は確かに硬化してゐます。ひからびて終ひました。情ないではありませんか。

何といつても、私共は一先づ脱皮しなければなりません。さうしなければ、生き切れません。私共も、もういゝ加減に、勇敢であつていゝと思ま

す。もういゝ加減に大膽であつていゝと思ひます

　手工の時に使ふ筋肉を、体操の時にも使ふではありませんか。算術の時に使ふ神經を、圖書の時にも使ふじやありませんか。そんなら一人一人の教師が、群雄割據みたいな眞似なぞしないで、AとBとCとDが互に手をとり合つて、一つの仕事で算術の稽古も、國語の修練も、地理の研究も、その何もかもを一緒に出來る樣な、そんな大まかな、大膽な、仕事が出來ないわけではありますまい。そんな仕事を見つけ出すことさへ出來たら、

　私達は、どの社會人にもまけない、力つよい人間となれるのです。腹の底から笑へる樣になれるのです。腹の底から笑へる樣になれゝば、友達が多くなります。協同も團結も眞實味のあるものとなります。

　職業婦人なんて、今の樣なこんなはなればなれな心を持つてゐて、何の親しみです。

　語り合ひたい。語り合ひたい。同志膝を交へてお互が開拓し合ふための仕事を語り合ひたい。そしてお互が手をたづさへて勇敢に立上つて見たい行詰つてゐる、といふよりは羊の樣に大人しいものに習慣づけられてゐるお互ひの前途のために、勇敢に奮鬪したい。友達をほしい。そして書物を讀みたい。力がほしい。

　仕事さへ出來たら、私達の皺はきつと伸びきります。愛相笑ひや、猫なせ聲には、もうあき／＼しました。それは僞善です。胡麿化しです。私達は、いつまでもそんな道具で人をだましてはなりません。人にだまされてもなりません。

　勇敢、勇敢、惰性を倒す啓蒙の主は只勇敢です

私達は、何時迄も安つぽい教育雑誌や、方法論に許りこびりついてゐてはなりません。子供を生かす爲に、私自身を生かす爲に、私共は人間を裁く爲の仕事を研究しなければならないのです。それが今の私共にとつての、切迫つまつた問題です

私共は人間を知らなければならないのです。人間の正体を、眞人間の正体を。それを知らなければならないのです、そして人間の子の悩を裁かねばならないのです。迷つてなんぞ居られた時代じやありません。そんな時代は、もうとうの昔に過ぎてゐるのです。『職業婦人とは、稼いで飯をたべる女なり』だけでは、なさけない。餘りに意氣地がなさ過ぎます。

今の女は、男より駄目ださうです。さう云はれるものですから、女は何でも男に追つゝかうとします。そして男に追いついたら、どうでも男の眞似をしなければ、豪くない様に思はれるのです。日本人が西洋人以上の人間を知らないもので、豪くなるためには、どうでも西洋人の眞似を仕様とするのと一緒です。男より偉い人間を知らない様な、そんな不聰明な女は、どうして母になれます

參政權なんぞ要りません。私達が豪くさへなつたら、ほしい物は何でもとれるのですから。

勉强したいと思ひます。

大事な生命の開拓を仕様と思へば、どうせ死物狂ひもしなければならない。血のにじむやうな苦しみをしないで、何で私達の生命が拓かれませう。

うつかりしては、居られません。

お互が、お互の爲に、勇敢に進み度と思ひます。

諸姉の健康を祈らせて、いたゞきます。

一四、六、二五

晩春によめる

井上美名子

新緑のふくらみいでしアカシヤの並木靜かに一人步みす

アカシヤの眞白き房の香ゆらげは去りにし旅の滿州を想ふ

あせらずに物想ふことを得覺えて五月の丘に陽あびてゐし

感激の心の波も高かりし五月晴れする過ぎにしその日

晴るゝ日に空飛ぶ鳶も尙低く眺めしことを想ひてもみぬ

クラリオネットなどいふ小笛をこの野邊に吹きてみまほし晩春の眞晝

はしごいの花もあせたり逝く春よたつぷりと浴びし皐月陽哉

野羊のそのやわらかき鉛色よ想ひをよする我がむねにふさわし

深く秘むその鈴蘭の香りよなラインの魔女の瞳ともみゆ



たそがれ

木村てるよ

現代

或施療病院の一室

秋山靜子　二十一

その母　五十

醫師　三十五

貧しバラックの室、靜子の病室

母、枕許に腰かけてゐる。青年らしき醫者、母親と向合ひに立つ。

醫『――でごうなさるのですか』

母『……　…』

醫『今、その方の御住所が判らないとでも仰言(おつしや)るのですか』

母『はあ、別れまして久しくなりますので、つひ

き丶もらしましたが……』
醫『そりやおかしいですね――とにかく、この手術は、一應、父親に逢つてその承諾がなければ出來ないことです。ほんとうならば、立合つてもらはなければならないのですが』
母『と申ししますと先生さま、どうしても父親をさがさなければならないのでございますか』
醫『まあ、そうしてもらひませんと。亡くなつたとか云ふなら別ですが、生きて居られるなら……かりそめにも人一人の生死にかゝわることですから……』
母『そして、この子を出しませんと娘の生命（いのち）はあぶないのでございますか？』
醫師はやゝためらふ。すぐ思ひきめたやうに、
醫『そう、今のところでは、どうも母体の方が大切ですから――可愛そうでも子供は出すがいゝと思ひます。このまゝにしてゐては、胸の方が進むばかりですから。ほんとうにお氣の毒でも……』
母（さすがに涙ぐむ）
母『先生さま、たつた一人の娘でございます。何とかして助けてやつて下さいまし』
醫『よく判つてゐます。出來るだけのことはしますから、とにかく、この子の父親の住所だけでもつきとめて、電報でいゝから返事をもらつて下さい』
云ひすてゝ、去る。母親しみぐ\と娘の寝顔に見入る。間―死のやうな沈默―靜子かすかにねがへりを打つ。目を開く
靜子『母さん』
母『おゝ、お目ざめかへ、少しは樂かえ』
靜子『えゝ、大分いゝの……今先生がいらつしやつてゐたでせう。何のお話でしたの』

母『…………』

靜子『ね、お母さん、かくさないで下さい』

母『隱しやしないんだよ……先生がね、そのやゝ子を出さなけりやならないと云はれるんでね…』

恐る恐る娘の顏色をうかがふ、靜子、はつとして目を開き、又力なく閉づる。ひくゝつく吐息

母『お前、云はないこちやない、氣分にさわるだらう。だから――』

靜子『否え、母さん心配しないで下さい、度々きかされて知つてゐます。でもね、私、一度、先生にようく申上なけりやならない事があるんです』

母『何を云ふの？』

靜子『――あたし、この子を生みます、と』

母、おどろく『え？』

靜子『お母さん、先生をこゝへ』

母、おど／＼する。『靜ちやん、おまへ』

靜子、じつと母親を見る。動かない態度、母、仕方なく室から出る

靜かな短い沈默。――ドア外より開く、さつきの醫師、母親と共に程よき所に立つ。

靜子『先生、お忙しいところをおよびかけ致しまして、失禮いたします』

醫『いや何、何かお話が――』

靜子『はあ少しばかり…』ためらふ。

深く息をつく、心を落付けて――

靜子『私はこの子を生みたいと思ひます。否え無鐵法の考へではございません。それはもう、此方に伺つた日から定めてあつたのです。先生、この子は父がありません。父と云ふやうなそんなやさしい親を持ちません。初めつから話しなければ

判りませんけれど、私は一人の男に妾奉公をしてゐましたの、その人は妻子のある、私の勤めてゐた會社の重役です。私は、その人に私のからだを自由にさせて、養はれてゐたのでございます。ところがこの子供が、私の中に育つて來たのでございます。日一日、生長して行くのを自分のおなかの中に感じました時、私は驚いて自分の心を見つめました』

――苦しさうに、深く息つく。醫者手をのべて水を與へる。彼女は首で會釋する。

靜子『――私は、自分がやがて母親になるのを確めると共に、何としても間違つてゐる生き方を改めやうと思ひました。私を單に、たゞ、慾望の滿足のために物質の情をかけてゐる人、そして、物質の滿足のために甘んじてそれを許してゐる私、この二人を親として生れて來るものゝ姿を思つて、私は無斷でその家を出てしまひました(…………けれども身重のからだで、つい思ふにまかせずこうして御厄介に上つたわけでございます。先生それで、私は何としてもこの子を私一人の力で生みたい、單なる生活方便としてみごもつた此子を人並の世の母親の、血の出るやうな愛情の中でどうかして滿足に生みたいと思つてゐます。出産のすみました上は、自分の力で働いて人に後指さゝれることなく、立派にそだてる決心でございますから、あの、何とかして、私にこの子を生ませて下さいまし』

醫者、ぢつと深い感動を面に表はして打まもるが、答へはない。

靜子『あの……先生、今この子を生みますことがどんなに苦しくとも、又生みますために死にましても、私はそれでいゝと思つております。――お

母さん、泣かないで下さい。私はこの子のおかげで人間らしい心になりました。正しい生活の仕方に目を開けることが出來ました。幼心にしみ込んだ物質の慾望が暗ましてしまつた心の目を、漸く開けることが出來ました。この子に對する愛故に一切をすてゝ自分が苦しむことが、この上もない感謝になりました。たとへ死にましても、私は、この子を殺して助かりたいとは思ひません』

醫師――吐息

醫『ようく判りました〳〵併し私としては、見す々々母体の危険を見越してお言葉に從ふことは出來ませんが、今しばらくあなたの決心を汲んで、母体の方に何とか手をつくして見ませう』

と云つて立たうとする。

靜子『ありがたうございます』

母親、おろ〳〵と涙まじりに醫師にすがる。

母『まあ先生、この子は……』

醫『いや、お母さん、私にまかせて下さい。惡くはしませんから』彼は深く首をたれて去る。

母『靜ちやん……』

靜子『……』

二人とも胸一ぱいの面持で、云はんとして云ひ得ず、氣まづい息づまるやうな沈默。

靜子、やがてさりげなく、

靜子『お母さん、氷が解けてしまつたわ』

母『あゝ、さうかへ』

母、涙をふきながら氷袋を持つて立つ。

ギーと灰色のドアのしまる音

室一ぱいのたそがれの色、かくて短い、澄んだ沈默。靜子はそつと上向きになる。……落付いた寂しい微笑がやつれた頬の上に浮む。……涙〳〵目にわく……

――幕――



轉落する帽子（覺書）

六月十日の日記。

家を出る時から氣が浮かなかつた。

家庭に入つてからの五六年、年に何回も外出したことのない私はいざ出るとなると、足袋もハンカチも半襟もなかつた。夫のぬぎ捨てた着物の袂から、手脂（てあぶら）のついたハンケチをそつとぬき出して、万々一、入用の時だけの要心にと、男の匂ひのしみたのを氣にしながら、帶の間深くおしこむだ。

丸の内へ、丸の内へ、五六年も見たことのない丸の内へ、震災當時にさへ、その被害狀態を聞かされても想像に浮ばなかつた、その緣遠い丸の内ビルデンヘゲ、洗ひざらしのメリンスを着てゆく、何度考へても私は氣がひけた。せめて、子供だけでも、時にあつたものを着せてゐるのならいゝのだが、六月の初めの、少し肌さむい日に、子供の着てゐるものといつては白地友禪に綿ネルの襦袢だ！、

けれども、そんな事にこだはつてはゐられなかつた。

『私、××××社へいつて來たいんですけれど、行けば、何かしら仕事があると思ふんですけれど……』

『そのうち行つて來るといゝね、單衣の一枚も出してね』

私は夫と幾度こんなことを言ひあつたか知れないけれど、一年も前に預けた質草一つも、どうしても出せる方算はつかなかつた。それどころではない、何か仕事を見つけて來ない事には、子供たちも浴衣にきかへることも出來ないのだ。私は思ひ切つて、後に戸をしめた。

路上は、私の目を眩惑した。

何といふ輕快な色の綜合だ！、何といふ味爽なる香の交響樂だ！、そして何といふ喧轟の車輪の音だ！、私はそれらのものから目を外らした。自分が、この何年か、まるで裏長屋の狹い廂間からしか天地をのぞいてゐなかつたことを感じさせられた。

電車の道筋さへ私にはよくわからなかつた。そして、乘降りの度に、胸がわく〳〵した。神田橋で日比谷ゆきに乘りかへようとした時、私は自分のあとからおりた肥り肉の婦人が、キャベツのやうにみづ〳〵した子供を抱きかゝへて、私の傍を足早くすりぬけたのを見た。その白茶色のスマートな洋服をきせられた子供は、何と上品で輕快であつたか！、私はきよろ〳〵と氣おくれして歩きなやむ自分の子供を、焦立しくもいぢらしく思はないではゐられなかつた。

狹い天地に、何と長い間跼蹐しゐたことか、貧乏と顏つきあはしてゐた間に、世間は、何十年の後

に私だけをおき去つたではないか！、

私は、自動車の警笛に、ハッとしておびえる子供を抱きかゝばひながら、爪先のやぶれた足袋をみつめた。

馬場先門で電車を降りる時にもゐはてた。その電車が、まるで私如きものを無關心に殘して疾走し去るのをみながら、他國に一人放り出されたやうな淋しさを感じた。十年も昔、故國の女學校を卒業した春、百三十里の旅を同伴者もなくて、唯一人夕方の新橋驛に吐き出された、その時の淋しさとたよりなさとを、再び感覺した。そして風、家を出る時、傘が要るかもしれないといつて、持つて來てゐたが、こゝでは、人々は雨傘などは幾世紀の後に忘れてしまつてゐた、風は、貧しい世紀のエトランゼーに、きつく吹きつけた。

『寒い、母ちやまさむい』

子供は風を寒がつた。廣い路と宏大な建物にのまれた。頻りに抱いてくれとせがんだ。

『も少しなのよ、今ぢき大きなお家へ入るんだから』

私はすかしながら、丸ビルの入口へ歩いた。

しかしその時、通り風は子供の頭から麥稈帽子を吹きさらつた。

『あッ』と、頓狂な聲を立てながら、それでも子供に泣き出されては大變だと、笑ひながらそれをおつかけた。くる〳〵と、帽子は埃の立つアスファルトの上をころげまはつた。やつと拾ひ上げて、子

供の手にもたせると、すぐに吹きとばされた。

『それを吹きとばしてしまつたら、代りを買ふのに又苦心しなければならない』

さふいふ心持に追はれながら、『しかしあんまり外見の惡い事もしたくない』といふ心持も手傳ひながら私はなほも轉げてゆく帽子をおつかけた。

しかし、私の心づかひは帽子と一緒にふみにじられてしまつた。

見よ、そんな心が懸つてゐるとも知らず、踵の高い靴でその帽子を蹴とばし、ふみにじつた洋裝の女は、その連れ立つた若い男と、腕を組み合さんばかりにして、さはやかに笑ひ興じてゆくではないか！

拾つてくれとせがむ子供を、邪險に叱りながら、私は丸ビルの入口へ吸ひこまれた。

丸ビル、日に幾万とかの人を呑吐するといふ丸ビル、東京の文明の一中心点といはれてゐる丸ビル私は手足まとひの子供をせき立てながら、エレベーターの在り場を探しまはつた。私の訪ねる雜誌社といふのは、その七階に事務所をもつてゐるのである。

やうやくにしてエレベーターの前に立つた時、誰かゞ私の肩を支へた。

『下駄を穿きかへて下さい』

はッとして、私は飛び退つた。しかし、そこには、私とはまるで無關係の人々が、器用にあるいてゐた。時世おくれを氣にしてゐる私などの存在をも知らぬやうに。

『あの、下駄を穿きかへるところは何處でせうか』
私は途方に暮れて、板草履を穿いた茶汲婆さんらしい人にたづねた。その女は親切に敎へてくれた。そして私は幸にも、敎へられた通り間違へずに地下室へいつて、草履と穿きかへることが出來て、エレベーターに乘つた。
ピシンと錠がおりて、すーつと上に昇る時の、宙吊りになるやうな心持、止る時のあの心臟を投り出されるやうな無氣味な心持、子供は、母ちやま、母ちやまと、袖にすがりついた。
檻!、檻!、と私は口の中で呟いた。エレベーターを檻とは、何とよく言つたものだらう。『檻』とは、或新進の作家が、この丸ビルの中に展開し醱酵する事件と氣分とを書き表した小說であつた。その作家は、私が訪ねやうとする雜誌社に、つい最近まで勤めてゐた筈であつた。
彼は、その中で、エレベーターをたとへて檻だといつた。そして人間はその中で野獸になる、といつた。もし私の推察に誤がないとしたら、彼はエレベーターや、斷髮や、迷宮のやうなオフイスや、資本主義の呼吸のかゝつた晝食や、それ等物質文明の所產のあらゆるものを醜いとみてゐる一人であつた。そして私はそれに共鳴してゐた。私も亦近代の物質文明を惡む一人であつたから。
『ここは七階でございますか』
『八階です、降りる方に乘つて、一階降りて下さい』
私は、子供の心にうつる恐怖の影を明らかにみた。そのエレベーターを捨てゝ、降りる方のに再び

乘らうとした時、子供は全身の力を手にこめて袖にすがりついた。

『母ちやま、いやよ、いやよ』

『だつて、これに乘つて降りなくちや、行けないのよ』

と、言ひきかせながら、私ぁ泣き出したい心になつた。階段を探し出して、私は七階までおりた。そして案内圖をたよりに、長い廊下を歩いた。

歩いても〳〵、探ねる事務所はわからなかつた。長い廊下は、視界をこえて消えてゐた。子供は、又あの檻の中へ入られるのではないかと、廊下が折れ曲る度に足擦して泣き立てた。

私は子供をすかしながら、淋しい思に胸をしめつけられた。

自然へ！、自然へ！、原始へ、原始へ、新鮮なる野菜へ！、潑溂たる產業革命以前の生活へ！、近代文明のあらゆるものが私は嫌であつた。

天を摩してそびえる建物、砂塵をまきあげて疾驅する自動車、人の生命をすりへらす器械工業、すべてそれらのものを、一思に足蹴にして私の好きな生活へ入つてゆきたい、それが私の好きな生活へ入つてゆきたい、それが私の、私共の理想であつた。その私は、文明の中心地点だといふところに仕事を求めに來て、野獸のやうにおびえる子供を引立てて歩せなければならない！

やつぱり自分も亦資本主義文明の濁流にまき込まれてゐるのではないか、而もその下積みの泥の中に！

その時、向ふから來た中年の巡視にたづねた。
『南の廊下へは』
『それはね、こゝを突き當つて右へおまがりなさい。ここは工事場ですから』
全く、そこは工事場であつた。材木や鐵管やコールタや、これが若い女の夢を織り出す丸ビルの中か！
さう思つて歩いてゆく私の後から、巡視の男は話しかけた。
『坊ちやん、よく歩きますね』
『えゝ』
『お三つですか、大きいですな』
私はその時、それだけの言葉にもすがりつきたかつた。泣き叫ぶ子供をつれて、この不案内のまことに檻のやうな建物の中を探しまはらなければならぬ母親の不幸さ。
その雜誌社は、やうやくにしてわかつたけれども、私の用は足りなかつた。訪ねる人はゐなかつたのである。
私は、七つの階段を、片手に子供を抱いて、コマのやうにかけおりて、地下室の下駄預り場の方へ急いだ。私の神經が、まるで末端にばかり針狀をして凝つてゐるのを感じた。
私と子供の頭の上で、文明は轟々の響をたてゝ煮へくりかへつてゐた。

△編輯室にて▽

六月号があまり貧弱なものに出來たので、一週間ほど、七月号のための原稿を書く元氣もない程ユーウツになつて困りました。

原稿募集『わが生活記錄』

一千字以内の字數にて願ひます
毎月の締切は十日
採否は御まかせ下さい

毎日の生活から得た感想、自慢話でも、煩悶でも、憤慨談でも、悲しみでも、喜びでも、全てありのまゝの記錄を書き止めて、この雜誌を讀むすべての友人に、其の感情を分ち合ふことにしたいと思ふのです。

あんなに嚴しいサイソクの手紙を十何本も頂いたのに對してだつて、愈々封を切つてから、隨分失望させたことだらうと思つては、ひとり恐縮して居ました。ごめんなさい。

○

さあ、夏になつた、この夏をどうして暮さうかな、などゝ景氣のよささうなことを話し合ひながら、蚊やり線香に火をつけて、慢談に時を過すこともある。農家では蠶が終つて、今、田園仕事の忙しさがつゞいてゐますといふ田園の便りが埃つぽい風にまぢつて時折此机の上を訪れます。どちらを向いても、忙しい顔ばかり。せめて、夏の内一日位、どこか、のんびりと浮世のいざこざを忘れて遊べる様になりたいものですね。

○

この雜誌に使つてある活字は古いので新活字を使つて居る外の雜誌を見ると、自分乍いやだな思ふのですが、然し印刷屋の方で特別に便宜を圖つて、いろ〳〵好意を持つてやつてくれますので、ちよつと他に變更する氣になれないで居ます今に、香柏社でも新活字を使ふ筈ですから、それまで我慢をしたいと思ふのです

（わかぐさ）

前納誌代

一部 二十五錢 郵税五厘
半年分（郵税共）一圓四十錢
一年分（郵税共）二圓八十錢

送金法

誌代は必ず前金の事
送金は振替で願ひます
誌代の受取證は別に出しません。雜誌發送を以てこれに代へます

大正十四年六月三十日印刷納本
大正十四年七月一日發行

發行編輯兼印刷人 奥むめお
東京市外巣鴨町一〇一九

印刷所 香柏社印刷所
東京市外西巣鴨町六六〇
電話小石川五一八四番

發行所 職業婦人社
東京市外巣鴨町一〇一九
振替東京六四一一六〇番

大正十三年十一月二十二日第三種郵便物認可
大正十四年六月三十日印刷納本
大正十四年七月一日發行（每月一回一日發行）

【定價金二十五錢】